

来ぶらり 2

特集・閲覧—図書館活用学 part 1

図書館でなくっちゃ物足りない

漱石の『三四郎』にこんなくだりがある。

高等学校の前で分れる時、三四郎は、

「難有^{あつた}う、大いに物足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、

「是から先は図書館でなくっちゃ物足りない」と言つて片町の方へ曲がつて仕舞つた。

落語のことを話していたあとの、別れぎわの場面であるが、三四郎はこの言葉をきっかけとして図書館を知り、読書の面白さを知つてゆく。この言葉は、図書館員を泣かせる。同時に、学生諸君の間で、こんな会話がさりげなく交されるようにならなければ、と思う目標でもある。勉強だ、趣味だ、というような区別などにかかわりなく、何かもの足りない想いを抱いたとき、ふつと図書館へ足を運んでしまう、そんなふうにならないものだろうか。これには図書館の姿勢がとても大事だから、ローレライの唄声のように、学生諸君を誘惑してしまいたい、いつも考えている。

(運用課長 佐野 真)

資料が学習院になかったら…。

必要な資料が学習院大学にない時でも、かんたんに諦めないで、図書館員に相談してみてください。利用者と資料の仲介役が司書の重要な仕事の一つなのです。ただ、所蔵館をつきとめることは大変むずかしく、不十分ながら『学術雑誌総合目録』等のツールを使って苦勞して捜します。

求める資料の所在が明らかになったら、できるだけ自分で出かけて、読むかコピーをとって下さい。それが一番速く、正確で、安上りな方法だからです。しかし、勝手に行つていきなり「閲覧したい」と言つても断られます。他大学図書館・他機関資料室所蔵の資料を使用するには、図書館発行の「利用依頼書」が必要です。でもその前に、ほんとうに学習院大学にないのが確かめましょう。

遠隔地でとても行くことができない場合には、郵送による文献複写を依頼することもできます。ただし時間と費用がかかりますし、文献について

の情報が正確でないと謝絶されることがあります。とくに逐次刊行物は、著者・論文名・巻号・年月・ページの正確さがポイントになります。この方法も図書館間の好意によるものですから、相手側の事情の尊重が前提条件です。たとえば国立大学図書館の場合、最低1ヶ月の期限を要すること、金額の多少に関わらず現金払いなので郵送料がかさむこと、料金到着後文献を発送するのでさらに時間がかかることなどを考えておかねばなりません。

実際に学習院生はどういう利用をしているでしょうか、1982年度の統計を紹介しましょう。紹介状の発行304件、そのうち早大99件、東大57件、慶大24件、以下1桁が続きます。他大学からの来館者は33名でした。文献複写依頼は104件、約半数の53件が教員、26件が院生の申し込みで、依頼先は慶大が18件でトップ、以下広大11件、京大9件と続きます。外部からの依頼は189件と、依頼に應ずるほうが多く、その中で最近では学習院発行の紀要類、たとえば文学部や法学部研究年報等が目立ちます。

(運用係 野村恵子)

利用率1.6%!?

図書館に学生が来ない、とよく言われる。試験期になると初めてやって来ましたという学生のなんと多いことか。図書館の所在地さえ正確に知らない学生もいるのではないかと余計な心配をしてしまう。

しかし本当に図書館を利用していないのだろうか。昨年度の統計を見てみよう。館外貸出者数は年間23,140人で、なにか多いような気がするが、学生総数で割ると1人約3.4回利用したことになる。単純に言って春秋冬に1回ずつといったところか。ちょっと寂しい数字である。1日平均にすると87人。これは全体の1.3%弱にしかならない。春・夏の休み中も開館していることを考慮しても、この値に大きい変動は望めない。では館内閲覧者数はどうか。年間6,488人。同じように算出するとこちらは1人年間1回に満たない。1日平均は24人で全体の約0.4%弱。館外・館内を合わせても年間4.3回。1日平均約111人で全体の1.6%である。

この現状は本学学生だけなのだろうか。例えば成蹊大学は年間10,601人。1日平均約43人で全体の1%に満たない。青山学院大学は年間15,608人で、1日平均75人、全体の0.5%にすぎない。3校の例だが、数字からみると昨今の学生は図書館を利用しているとは思えない。教育の最高機関である大学図書館のひとつの現状としてはあまりにも貧弱すぎるのではないか。レジャーランド大学である。

しかしながら、図書館の利用で貸出、閲覧はメインではあるが総てではない。雑誌の利用、複写サービス等、そして最も利用頻度の高い参考室。資料を捜し、文献を検索し、無ければ相互協力を利用する。こういった前述の数字には現われない利用者が数多くいることも見逃せない。また、各研究室の図書は専門的資料も多く、その総数は図書館をはるかに越える。これらの図書室の利用者もかなり多いことも考えておく必要がある。

図書館は貸本屋ではなく、これをうまく利用するには、図書館のもつ様々なサービスをフルに活用し色々な情報を吸収することである。その為にまず自分の足を図書館に何回も運びこむことである。

(成蹊大学・青山学院大学は'81年度資料を参考)

(和書係 中村丈夫)



出納台周辺

▶ 英語のテキスト御持参

「この訳本ありませんか!!」昔はこっそり調べたもんだ。今アツケラカン。

▶ カード目録、抜き取って御持参

「これ、出して下さい!!」図書館利用の初歩さえわきまえず、その後片付けも給料のうちか。

▶ 常連の福岡の丁君

卒業後5年も通いつめたのに。司法試験はあきらめたという。努力だけでは報われぬ世の中。

▶ 最後に女子学生に一言

カウンター前お通りの時はおしとやかだが、その奥のトイレに入ったとたんのあのキンキン声!!すべてはつつ抜けですぞ。今一度、張紙に御注意。

——こういうこと書くオレ。分別くさい目付。ソロソロ、オレもオジンの仲間入りか。——

(運用係 北村 誠)

文庫のルーツは1903年(明治36年)富山房で出した袖珍名著文庫が最初。「芭蕉翁絵詞伝」「雨月物語」など、おもに国文学の名作・名著を収録。1910年(明治43年)三教書院の袖珍文庫も発刊。

洋書係から

洋書係の仕事はおおよそ次のとおりです。①大学内に備え付ける洋書1冊ごとにカードに記録をとる(著者・書名・ページ数等)。②書架に並べる順番を決める。③実際に本を探す際の手がかり(分類・著者・共著者等)の範囲とその表示法を決める。④そのために必要なカードをコピーして配列し、目録を常に生きた状態に保つ。

これらの処理に、アメリカの議会図書館(Library of Congress 略してLC)で出しているNational Union Catalog)を極力利用しています。

LCは1965年の法律で、世界中の新刊書の中で調査価値のある本すべてを収集し速やかにその書誌情報を頒布することを義務づけられており、議会には必要な予算を支出することを承認したのです。現実には、外国書がLCのカタログに載るのは発行後1~2年過ぎてからですので、ドイツ語フランス語等の新刊書に関しては工作上あまり頼りませ

ん。「外国書」の図書館内で占める場所が日本とアメリカでは異なるのかもしれませんが。

LCはまた、一方で機械可読目録(Machine Readable Cataloging 略してMARC)を開発し、1969年にMARC tapeの頒布を開始しました。各国のMARCの先がけで、LC MARCと呼ばれています。そして1980年で自館のカード目録は凍結し、以降はコンピュータのOnline accessに踏み切ったのです。そのLC MARCにオリジナルな目録も加えたデータベースを共有して、アメリカには図書館ネットワークがいくつかあり、各端末からカードの発注や資料の相互利用などを行っています。

同じようなネットワークが、イギリス、ドイツでも活動しています。いま図書館はコンピュータを利用したネットワークによる資源共有(Resource share)に向かっていると言えるでしょう。日本でも「学術情報システム」の準備が進められています。将来、学習院もそれに参加して、私たちの仕事のやり方も変わっていくことでしょう。

(洋書係 広瀬淳子)

伊勢物語 一蔵書紹介

伊勢物語といえば、「美男、気まま、それでいて歌がうまい」と評判の在原業平についての逸話に基づいて書かれた物語としてあまりにも有名で、「むかし、男、初冠して……」の冒頭の1節を思い浮かべる人も多いだろう。

伊勢物語は10世紀初めにはその原形ができていたと言われ、10世紀中ごろまでには内容が増大されたり整理されたりして今日よく知られている本文に近いものができ、その後いろいろ手が加えられていったようだ。変遷に伴い、さまざまな本文が伝えられていて、現存する写本の数は数百を下らないという。なかでも、歌人であり古典学者でもある藤原定家の書写したものの系統をふむ写本(定家は何度も書写したようだが、自筆本は失われている)が信頼のおけるものとされている。

本館蔵の伊勢物語は、付されていた1枚の紙片によって定家が書写したと伝えられているもので、「伝定家筆本」と呼ばれている。実際には定家自

筆本ではなく、室町時代に何者かが自筆本を書写したものであろう。ただ、今はすべての自筆本が失われているので、紙片により由緒が正しく、定家自筆の面影が忠実に残っているという理由でとりわけ珍重されている。新典社や武蔵野書院から影印本が刊行されているほか、マイクロフィルム版もあり、『日本古典文学大系』『日本古典文学全集』などの校注書の底本としても用いられている。

学習院蔵本になったのは昭和24年4月。国文科創設の折、国文科が三條西家(中世における有職家柄として名高い)から譲り受けた100余点の本のうちの1つで、特に貴重だということで図書館が保管することになったもの。

現在は、虫食いもほとんどなく、比較的きれいな状態で書庫の貴重書コーナーに収められている。専門に研究する人は所定の手続をとってこれにあたってもいいし、これから読もうとする人は先にあげた校注書に臨むのもいいだろう。この秋、「初冠」から「つひにゆく道」までの125段に雅の世界を想起してみたいかがだろうか。

(和書係 工藤晶子)

新書のルーツは1938年(昭和13年)の岩波新書赤版が最初。学問諸分野の現代知識を簡易に説明提供した。戦後1949年(昭和24年)青版として再出発。1954年(昭和29年)光文社のカッパブックスも発刊。

参考室あれこれ

○コーチャンのスペルと経歴を知りたい。

人物について調べる時、まず念頭に浮かぶのは各種の人名事典である。コーチャンで連想されるのはロッキード事件。事件発生からだいぶ経っているが『年刊人物情報事典』'82 V 社会・世相・事件編を引く。コーチャンの項目あり。だが原綴はない。「1976年2月米連邦議会の公聴会の席で、日本人署名のある巨額の金額入り領収証を提出し……」という解説から年月が判明。『毎日ニュース事典』1977年版を引く。「コーチャン、A・カール (Kotchian, A. Carl)」と出ている。これでスペルの問題は解決。

前述の事典にもし項目がなかったらどうするか。ちなみに、『現代人物事典』(1977年刊)には、児玉誉士夫の項目のもとにコーチャンの証言という文が見出されたが、コーチャンの項目はたてていない。ロッキード事件→英字新聞の図式が考えられる。『現代用語の基礎知識』1983年版を引くと「昭和51年2月4日米上院外交委員会多国籍企業分科委員会でロッキード社の航空機

売込みに関し……」とあるが、コーチャンは出てこない。昭和51年ということで、『朝日年鑑』1977年版を見ると、特集で扱っており、「2月6日多国籍企業小委はロッキード社副会長A・C・コーチャンの出頭を求めた」という文が目にとまる。そこで『The Japan Times』にあたる。6日にはなく、7日の第1面に写真とともに名前が載っている。

次に経歴であるが、『年刊人物情報事典』『毎日ニュース事典』の解説および同書に掲載されている参考資料(現物未所蔵のため未確認もある)では、経歴に触れていない。『Who's who in America』を見る。当館所蔵の1974-75、1976-77、1978-79年版に載っていた(1980-81年版にはない)。短い解説であるが、生年、住所、学歴、業績など経歴を知ることができる。

著名な人物であると事典に登載されることが多いので調査が容易であるが、特殊な人物、無名な人物は資料が少なく難しい。国籍、生没年、活躍分野、関連事件など人物に関する事柄が、解決への糸口となる。質問をされる時は、名前だけでなく、周辺の情報も提示して欲しい。

(参考係 久保田安子)

お知らせ

○大学祭の期間中は図書館を閉館します！

11月2日(水)から7日(月)の大学祭期間中は、展示会場として使用されますので、図書館は閉館します。利用できませんのでご注意ください。

○ご意見箱を設置しています。

2階目録室の緑色掲示板のところに、投書箱を設置しています。図書館を利用して感じたこと、疑問に思ったことなど、ご意見を寄せ下さい。お待ちしております。

○図書購入希望について

利用したい本が図書館にない場合、購入を希望することができます。「図書購入希望票」に記入して出して下さい。すべて図書選定会議にかけたうえで、結果を掲示しています。予算の問題もありますが、なるべく要望に応じられるように努力し

ています。

○展示コーナーから

2階出納台の横にあるガラスの陳列台を使って、展示をしています。これは図書館に埋もれたままの貴重な資料を、少しでも多くの人達の目に触れる機会を作ろうと、1979年から始めたものです。毎回、館員が苦心してまとめています。今回で42回になります。パンフレットもありますので、是非一度お越し下さい。

○読書週間よせて

井上ひさし氏の1ヶ月の書籍代が平均200万円とかいわれるのを耳にすると、図書館を利用しない手はないという思いを強くする。読書の秋です。1冊の本をじっくり読みこなすのときには良いものです。虫の音が聞こえてくれば最高！

来ぶらり No.2 1983年10月1日発行

編集委員： 甲斐静子 清水裕子 中村丈夫

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 Tel. (986)0221